

一 乘義をめぐる師会と観復の論争について

吉 田 剛

高麗の義天によって、それまで散逸していた經疏類が杭州慧因寺の淨源の元へ逆輸入されてから（一〇八五）、江南における華嚴学は發展し、趙宋の四大家として知られる師会（一〇二二—一八六）と観復（一一四六—）との間で論争が繰り広げられた。ここでは、現存する文献から師会と観復の説を具体的に比較検討したうえで、両者の立場の根本的違いを探り、趙宋華嚴の体系の中に位置づけたい。

教学上における両者の相違は、同別二教判とりわけ同教の判じ方にあり、それが両者の一乘説の相違として表れている。それは『五教章』の解釈と関連して、別教の中の該撰門の扱い方に由来するものである。当時の華嚴教学は澄観・宗密の影響が強く、観復はその全棟全取という概念を『五教章』の解釈に反映させた。しかし師会はこれを華嚴別教一乘の獨尊性を損なう説と受け止める。師会は新たに入藏開版された智儼・法藏の文献を閲覽して自らの解釈に確信を得るや、『華嚴一乘分齊章焚薪』を著して、観復の解釈は同教を以て

別教に属せしめる本末転倒な解釈であると批評した。師会も澄観、宗密の教学を直接批判するものではないが、それらの教学を如何に扱うかが両者の教学を分かつところである。

師会は『華嚴五教章復古記』で、『五教章』の「普賢門に就いて復た二門を作る。一には分相門、二には該撰門なり」という部分を釈して、分相該撰二門を設けるのは、一乗が余宗とはるかに異なるものであると同時に、余宗を統収して異ならぬことを明かすためであるとして、一乗の優越性を強調している。すなわち、別教の領域では余の諸教は虚空の如くであつて方便無体であり、『五教章』に説かれる「三乗は本来的に一乘である」という該撰門の施設を一乗が卓越していることの根拠として見ているのである。

これに比して、観復が『五教章折薪記』で同じ箇所を解釈する際、⁽²⁾には師会が説くような徹底した一乗の優越性は表されていない。すなわち、分相門とは全三の一（三乗を完備している一乗）を以て全一の三（一乗を保持する三乗）をより分け

ることであり、該撰門とは全一の三（一乗を保持する三乗）が本来的に全三の一（三乗を完備している一乗）であることと述べ、一乗と三乗の斉同性を根底に据えて三乗の実体性を認めているのである。観復はさらに、一乗と三乗は相を分かつと雖も一乗と三乗は不同ではなく、一乗が三乗を該撰するとは雖も一乗は三乗と不異ではないと述べ、一乗と三乗とは異にして同、同じにして異であるとして、分相門の中にも該撰的要素を認め、該撰門の中にも分相的要素を認め、この二門は掬取自在であるとして、分相該撰二門の形式をあえて解きほぐすかのようである。

観復によるこのような解釈は、「方便無体の故に一乗は卓絶独立している」として別教一乗を高く位置づける師会の解釈とは大きく異なっている。

三乗の実体性を認めた上で三乗と一乗との斉同性を説くのは、正に三一相對した上でそれらが互いに能同所同となることを説く同教の領域に於いてなされるものである。故に師会は『華嚴一乘分齊章焚薪』で、観復の説は同教を以て別教に属せしめるものであり、本末転倒していると論駁したのである。⁽³⁾

華嚴教学では、別教は華嚴の内容であり、一乗の機根（普機）の者によって修習され、同教はそれ以外の機根（別機）のための方便にすぎないとされる。したがって、同教の内容を

別教に持ち来たつて解釈することは別教の価値を下げることになる。これが師会による観復批判の主な内容である。

では、観復が別教の内容を説明する際に、同教的な解釈を以てする意図は一体どこにあるのであろうか。

実は観復は師会の見方とは反対に、同教の価値を高く見ているのである。

澄観は全掬および全取という言葉を用い、「五教を全取し乃し人天に至るまで総じて包まざること無し（中略）円は必ず四を撰す」と説いているが、宗密は全掬と全取を対応関係にあると見て、それぞれを別教と同教に当てている。観復はこれを承けて、四種の同教を立て、三一和合同・泯二同・義類相似同と共に、これを全取諸教同と名付けて同教として定義し解釈している。⁽⁵⁾

五教判のうちの前四教は第五円教に撰せられ、一つ一つの教えは皆な円教に同ずるのだとする全取門の立場は、円教の包含性と無尽なる融合性を顕さんとするもので、むしろ別教の該撰門の領域に属すものとされるべきである。しかし観復がこれを同教のひとつに数える理由は、彼が同教を以て円教の包含性を示すものとして把握しているためにほかならない。故に観復は、そのような円教の包含性を示すものとして定義された同教がベースとなつて、別教の成立する所以が導き出されるのだとするのである。

このような理解によつて観復は、あくまでも方便無体の立場をとらず、一乗が諸教と異なるのはその中に諸教を具有しているからであると考え、全収を同教に当てる際にも、三乗の存在を空することなくして一乗がそれらを普く収め尽くすことをその内容としているのである。観復が、分相該撰二門を解釈する際、単に一乗とか三乗とは言わず、「全三の一」とか「全一の三」などという表現を用いたのはこの意味を顯す為である。

「全」という字は全徳・全真・全人などのように用いられ、完備・保持・保全・統括などの意味であり、「全三の一」といえば三乗をその中に完全に具えた一乗を意味し、「全一の三」といえば一乗を保持しそれに順応する三乗という意味になり、一乗と三乗を分かち揀ぶとするも、一乗が三乗を摂し取めるとするも、全の字を冠することによつて、三乗の存在を空ける姿勢は無くなってしまうのである。

このように、師会と観復とは同教の定義が異なる。師会は同教の内容は会三帰一にきわまるとするが、観復はそれを円教の包含性と見ている。師会からすれば観復は同教の定義を間違っているのみならず、一乗に直接趣入する普機の存在を知らず、同教と別教を混乱していると受け止められることになる。

澄観が打ち立てた全収という概念を同教の義に当てるの

は、続蔵本の『行願品疏鈔』に「諸宗を全収するは即ち同教縁起の義」とあり、既に宗密がそのように説いていたようであるが、後に円字が同と書き改められたという説もあり、検討を要する。ただし後の浄源や宗豫もやはり全収門を同教の義としており、観復はこのような当時の伝統解釈を受け継いだにすぎない。また、諸教の実体性を認め、それらを具有することこそを勝とするが如き立場は、宗密教学の特徴ともいえるもので、智儼・法蔵の文献がほぼ散逸していた趙宋の当時においては、このような立場が義天の入宋まで主流となっていた。しかし、『円覚経』をはじめ、『首楞嚴経』『楞伽経』などの注釈もこのような立場で説かれることが多く、もし華嚴についてもこの立場を用いれば、華嚴の独尊性が翳ることとなるであろう。師会はこれを恐れて華嚴別教一乗の独尊を強調し、観復の解釈を激しく論駁したのであった。

- 1 『復古記』続蔵二一八一三、一九九左上
- 2 『折薪記』続蔵二一八一二、一六八右上／右下所引
- 3 『焚薪』続蔵二一八一二、一六八右下／左上
- 4 『華嚴経疏』大正蔵三五、五一四上
- 5 『会解記』金沢文庫研究紀要第五号、二〇一頁
- 6 『行願品疏鈔』続蔵一七七一五、四〇一右上
- 7 『明宗記』続蔵二一八一、二六左上

〈キーワード〉 師会、観復、同教、別教、全揀全収

(駒沢大学大学院)